

〈原 著〉  
過去11年間の松山赤十字病院歯科  
における矯正患者の統計的観察

やまだ矯正歯科クリニック

山田 哲郎

つか矯正歯科

柄 博治

渡辺矯正歯科

渡辺八十夫

ロイヤル矯正歯科

鶴田 仁史

松山赤十字病院歯科

西川 信吉, 高岡 吟子, 櫻井 裕也

広島大学歯科部歯科矯正学講座

丹根 一夫

キーワード：矯正患者, 統計的観察, 不正咬合

Statistical observation of orthodontic patients  
in the dental clinic, Matsuyama Red Cross Hospital

Tetsuro Yamada

Yamada Orthodontic Office

Hiroharu Tsuka

Tsuka Orthodontic Office

Yasoo Watanabe

Watanabe Orthodontic Office

Hitoshi Tsuruda

Royal Orthodontic Office

Nobuyoshi Nishikawa, Ginko Takaoka, Hiroya Sakurai,

Department of Dentistry, Matsuyama Red Cross Hospital

Kazuo Tanne

Department of Orthodontics, School of Dentistry, Hiroshima University

(Director : Kazuo Tanne)

Key words :

orthodontic patients, statistical observation, malocclusion

連絡先：山田哲郎 やまだ矯正歯科クリニック

〒732 広島市南区猿猴橋町 5-12 TEL 082-262-4618

はじめに

松山赤十字病院歯科では、昭和50年より歯科矯正治療を開始し、昭和58年より広島大学歯学部歯科矯正学講座の協力を得て、2週間に1日という限定された診療体制のもとに多くの矯正患者の治療を行ってきた。この間に、昭和53年には矯正歯科の標榜が認められ、また昭和57年には口唇裂口蓋裂患者の矯正治療に健康保険が適用されるなど矯正治療を取り巻く社会情勢は大きく変化してきた。また、ここ数年、松山市内の矯正専門歯科医院数は5医療機関と増加してきた。そこで過去11年間を振り返り、当院歯科における矯正患者の実態調査を行ったので報告する。

調査対象および調査項目

昭和58年4月より平成5年3月までの11年間に松山赤十字病院歯科において矯正治療を開始した患者254名を調査対象とし、以下の項目について調査を行った。

- 1) 初診時年齢, 2) 性別, 3) 初診時年月日, 4) 不正咬合分類, 5) 居住地域, 6) 治療段階。

結果および考察

1. 初診時年齢, 男女比

初診時年齢は6~12歳の学童期の患者が68.5%と全体の2/3以上を占め、8歳がピークを示していた。これは、前歯部の不正咬合が発現し、また、その後の側方歯の交換期に不正が顕著になり、保護者にも不正咬合と認識できる時期に相当するためと思われ、過去の報告<sup>1)2)3)4)</sup>と同じ傾向を示していた。20歳以上の成人患者は9.4%であった。他の報告<sup>3)5)</sup>でも成人患者が1割前後を占め、近年、増加傾向にあると言われている。これは最近の「よりよく生きる」という意識の向上の中で歯列矯正に対する認識の高まり、経済的余裕などが反映されているためと思われる。

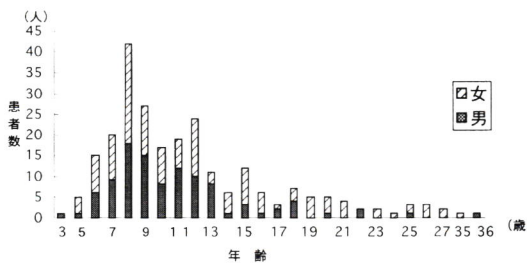


図1. 初診時年齢別患者数

男女別にみると、男子104名、女子150名であり、男女比は男子：女子=1：1.44で、女子が男子よりやや多い程度であった。近年の他の報告<sup>3)5)</sup>でも男子の割合が増加しつつあると言われている。これは本人あるいは保護者の歯列矯正に対する関心が性別を問わず高いことをものがたっているものと思われた。年齢別の男女比をみると年齢により多少の変動はあるものの、上記の傾向と大きく異なるところはみられなかった(図1)。

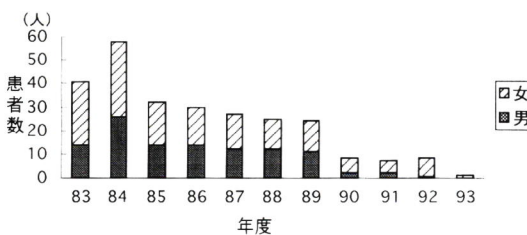


図2. 初診時年度別患者数

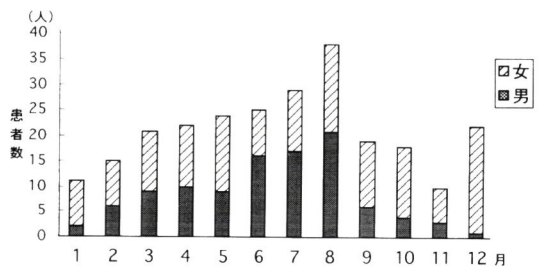


図3. 初診時月別患者数

2. 年度別初診患者数と月別患者数

年度別初診患者数は1983年度、84年度と増加したが、85年度以降はわずかず減少していた。これは84年度までは、治療を希望する患者を全て受け入れていたが、85年度以降は松山市内の矯正専門歯科医院へ紹介することが多くなったため、減少したものと思われた。さらに、90年度以降は口唇裂口蓋裂患者、外科的矯正術を併用する必要のある顎変形症患者などの難症例のみを受け付けたため10名以下と極端な減少を示した(図2)。

月別患者数をもっとも多いのは8月、次いで7月となっており夏期休暇を含めた2ヵ月間に全体の26%が来院していた。このように長期休暇中に初診で来院する患者が多いことは一般的傾向と思われる<sup>3)5)</sup>。逆に1月、2月、11月が